

3月11日午後2時46分、ちょうどこの時私は第5回久留里の「鄙の雛展」を回遊して地域交流センターロビーに飾られた孟宗竹を使った「創作かぐや姫展」を見学して、観光交流センターの黒川さん相手に、館内で遅い昼食をとりながら、四方山話を致しておりました。

すると突然、ドスン！グラグラと今まで経験の無い異様な衝撃と共に大きな揺れが襲って来ました。耐震性を重視して建て替えられた大谷石の建物ですが、石造物の重厚さはかえって凄い圧迫感がありました。しばらくはじっと様子を見ていましたが、館内のラジオが東北地方に大地震が発生し、大津波の危険があるから急いで避難する様、繰り返し放送されており事の重大さを初めて知りました。あの時の地震が、東北関東の太平洋岸を壊滅させる大津波になろうとは想像もできませんでした。

改めて被災者の方々の一日も早い回復と亡くなられた方々のご冥福を祈る思いであります。

こうした混乱する大惨状の中にあっても日本の人々は極めて沈着、冷静に整然としたマナーを守って行動する姿には世界の人々が感銘を受け、大きな賞讃を送ってくれております。

日頃、少し軽薄と思えた日本人のこの姿に多くの人々が安堵と誇りに胸を熱くした事と思います。まさに「頑張れ東北！頑張れ日本！世界の人が見ているぞ！」であります。

—暗闇の中に灯りが—

3月15日から計画停電が始まり、17日は夕方16時過ぎから停電となりました。独居老人の私にとっては全く未知の暗闇の世界ですから、どう一晩を過ごすべきかとまどい、身の置き所が分からない不安と孤立感に襲われました。

孫娘から「こちらへ移動する様に」と言われましたが断るとやがて夕食と湯たんぼ等を持ってやって来て孫娘から細く注意、指示されて日が暮れました。真っ暗になってローソクの灯りの中で何を見ることもすることも無くなり、惘然たる思いのところへ電話が鳴って、「灯りはローソクですが店を開いておりますから良かったらお出かけ下さい」と地獄で仏の思いで聞きました。世の中捨てたものではなく、また次の電話が鳴って、「停電が8時に終わったら始めますから…」と闇夜に灯りの思いで聞きました。「日頃夕食に来られ、一杯、召し上がって下さる方々がこんな時お困りにならない様お役に立てば…」とおかみさん方は言われ、私は夕食をお世話になり、孫と市内を一回りして久留里まで車を走らせました。小さなローソクの灯りがゆれている店が何軒もありました。「よくぞ灯りを点けてくれました」と涙が溢れる感動がありました。声をかけますと「いつもの倍くらいのお客さんが来て下さって喜ばれております。大型店と違う土俵で商いが出来てうれしいです。」

「困った時頼りになる店…」これが地方中小企業の価値であり、生きる道であります。頑張れ東北！！頑張れ地方産業！！これを機会に今まで以上に助け合いの絆を太くして、被災者の方々へは精一杯の支援をお願い申し上げます。